随　想

葬儀諸々

宮本　　健[*1]
Miyamoto Ken

一昨年の冬に父親が亡くなりました。亡くなった日から告別式までの諸々を記します。葬儀については、マニュアル本も数多く出ていますが、なかなかその通りには行かないものなので、実例として今回の記録を残したいと思います。

【プロローグ】

死の前週に、老人ホームに入所していた父親の容態が悪化したので、入院することになり実家のある大分に帰りました。

大分で嫁いでいる妹と父親を見舞った後、近くの病院に入院していた母親の見舞いにも行きました。

ここでの会話はドラマや小説とはほど遠く、父親の葬儀の下打ち合わせでした。私が関東在住・母親は入院中・妹は他家という状況のため、いざという時には準備が間に合わないので、あらかじめ決めておこうというものでした。これが後で役に立ちました。

【本編】

その後、私は、単身赴任先の横浜に戻りゴルフに行き、アパートに帰って寝ようとした時に妹から電話がありました。「父親が亡くなった」と。しかし、次の言葉は想定外でした。「すぐに遺体を引き取ってくれと病院から言われているがどうしよう」と。こんな真夜中なので、一晩くらい置いてくれるかと思っていました。妹は業者に頼んで1時間かけて実家（杵築）に運んだとのこと。それから、親戚、知人へ連絡したのですが、この点は前週の下打ち合わせが効いて、スムーズにいきました。

埼玉の妻に連絡したところ、インフルエンザにかかって高熱なので熱が下がり次第行くとのこと。これも想定外！翌朝、私はひとりで飛行機に乗って実家に帰ると、遺体を囲んで近くの親戚と葬儀社が揃っており、早速私に葬儀の発注項目を決めてくれと迫ってきました。めんどうくさいので葬儀社の薦めるままに首を縦に振っていましたが、葬儀社の次の注文は、またまた想定外でした。式場で焼香者を放送で順番に読み上げるので、フルネームと読み方を記入して順番もつけて下さいと。（叔母さんは、子が付くんだっけ、付かないんだっけ。今更聞きにくいし。父親の亡き姉の旦那と父親の弟はどっちが先だろうとか）遺体を拝

*1：取締役　管理室長　品質保証担当

む間もなく作業に没頭していると、親戚が空港に着いたが、迎えの運転手が足りないので私も行くはめに。

帰ってくると、いわゆる送り人が来ました。営業車にはお湯を入れたタンクがついており、そこから部屋へホースを引っ張り込み遺体を洗い始めましたが、映画のように荘厳ではなく、実に手際よく作業がおこなわれるので感心して見ていました。綿を詰め化粧をほどこすと、遺体が生き返っていくようでした。さすがに、この間はこちらの事務作業を止めているので、初めて遺体とじっくり対することができました。

こうして、無事に通夜へとこぎつけたと思いきや、次々と想定外が発生しました。

その 1. 坊さんが 3 人も来る。私は頼んだ覚えがないのに。葬儀社と寺が結託したに違いない。檀家寺から 2 人と遠い町から応援が 1 人。応援の人は会席には出ないので、お布施と交通費と食事代を出してくれとのこと。

それはいいが、金額がわからない。それは、そちらのお気持ちでと言われるのみ。

その 2. 通夜の読経の最中に、葬儀社の人が私に「緊急の電話が入っています」と。かけてきたのは、親戚を泊めるために予約してあった旅館で、「ボイラーが故障してお風呂が沸かせない」と。結局、読経は上の空。

翌日は、いよいよ告別式だが、事前の調整で、午前が焼き場で、午後が告別式となった。「えー！焼いてから葬儀！」というと、「午後は焼き場が混んでいるので先に焼くのです。杵築の焼き場が廃止になって別府のを使うようになってからは、よそ者は午前、地元は午後がパターンになっている」との回答。そういえば、通っていた高校の近くに焼き場があって、風向きによっては煙が流れてきていたっけ。あれでは廃止もされるだろうな。と記憶がよみがえりました。

告別式当日の朝は、近親者だけが集まって坊さんによる読経をすませ、いよいよ焼き場に向かうことになりました。喪主たる私は葬儀車に乗ったので、運転手しか話し相手がいませんでした。焼き場は山の方にあって冬場は道が凍るので、気を使いますと運転手氏。その日も 2 月の寒い日だったので、凍った道でスリップして棺桶が転がりだしたら大変だろうなとか想像する内に無事焼き場に着きました。

最近は、焼き場が地域から嫌われて人里離れたところに複数の市町村が共同施設を建設することが多いので、どこも大規模です。

焼きあがるまでは、料理を食って待ってて下さいとのことで、別室に行くと料理が山のようにありました。

これって何人前？間違って倍の量が届いていました。それからは、もったいないから持って帰ろうということになり、詰める容器だとか、だれが何を持って帰るだとか騒いでいる内に、宮本さん焼きあがりましたとの館内放送。では行こうということになったが、おじさんが 2 人いません。「景色がいいからと散歩に行ったようだよ」という親戚情報で、慌てて探しに行きました。何とか見つけて火葬室に勢ぞろいすると、既に釜から引き出されていました。骨を拾って骨壺に移す作業ですが、長男は喉の骨だとか指示する親戚がいました。

足から順に拾っていくと肩のあたりで壺が一杯になってきたので、私はもう止めようかと思っていたら、親戚の中から仕切り屋が出てきて、「こうすれば全部入る」と言って、骨壺に箸を突っ込んでガシガシ潰しはじめました。そのおかげで頭部まで無事に入りました。

骨壺を両手で抱えて（義父の葬儀の際に、持ち

にくいので片手でぶらさげて運んだら怒られた反省を活かして）葬儀場に戻って来ました。いよいよ告別式です。皆整列したところで、私の母親の姿が見えない。母親は入院中だったので、医者の許可をとって近くの旅館で休ませていたのですが、焼き場の帰りに拾ってくるのをすっかり忘れていた。慌てて、甥に迎えに行かせたら、旅館でのんびり昼ごはんを食ってたそうです。ということで、全員揃って無事に告別式が始まったが、既に骨壺となっているので49日のようでありました。筆頭の坊さんは高齢で、息をする度に異音をたてていたが、さすがに読経は年季が入っていた。しかし、私に相談もなくつけられた戒名の字がまるで小学生の習字のようで、ありがたみが薄れるようでした。

その後は何事もなく進み、会席の料亭へと移動したが、その料亭のおかみは同級生の姉さん（学生の頃はマドンナ風）なのだが、ひと月前もそこで叔父さんの葬式の会席をやったばかりなので、毎度！という感じ。

読経が終わったら帰ると思っていたヨイヨイの坊さんは会席に来てしっかりと飲んで食っていました。

会席が終わって親戚がいる旅館に行って、皆と父親の思い出話を始めたとたんに初めて涙が出てきました。

四国遍路第21番札所　太龍寺
（ネットとくしま「徳島情報サイト」から転載）
宮本家の墓の近くに所在で、父親も私もこの近くで生まれた

【エピローグ】

この後も、永代供養料をめぐるお寺との攻防、49日法事、徳島に渡っての納骨式、相続手続きと続くのですが、紙面も尽きてきたので、またの機会に。

取締役
管理室長
品質保証担当
宮本　健
TEL. 03-3778-7948
FAX. 03-3778-7950